

第27回都市景観セミナー

マチナミドリ座談会 ～まち並み×緑＝ゆるくつながる～

開催記録



～セミナーの流れ～

01. 市からのセミナー趣旨説明開会
02. パネリスト自己紹介&取り組み紹介
03. パネルディスカッション
04. いいねタイム&フリートーク
05. いいねタイムのふりかえり

01 市からのセミナー 趣旨説明

「緑」に注目してまちづくりの楽しさを語りたいという想いで、今回は『マチナミドリ座談会～まち並み×緑=ゆるくつながる～』というテーマにしました。

「緑」には、植えたり・愛でたり・水をあげたりといった、みんなが関われる力があると考えています。「景観絵本」にもまちなかに緑があふれている将来イメージたくさん描きました。

行政の手法として、「ルール」を考えてからその実現イメージを絵にするという手法をよくとるのですが、本当は逆で、先に「どうありたいか」を共有することが大事なのではないかと考えま

した。そこで八王子駅周辺では、最初に大まかなイメージスケッチを作り、それを地元の方々や学生さんたちの意見を聞きながら磨いていくといった作業を行いました。この絵本には専門家や地元の方々の期待や、やりたいことが盛り込まれています。また、子供でも読めるものにしたいという想いから「絵本」としています。この景観絵本で、地域の将来ビジョンを皆さんで共有し、景観形成のムーブメントを起こせたらいいなと考えています。

今回の取り組みをきっかけに、行政が単独で規制だけするような景観行政ではなく、協働で共に作っていく景観行政としたいと考えています。



令和4年(2022年)8月 発行

02 パネリスト自己紹介 & 取り組み紹介



川原 晋さん
東京都立大学 教授

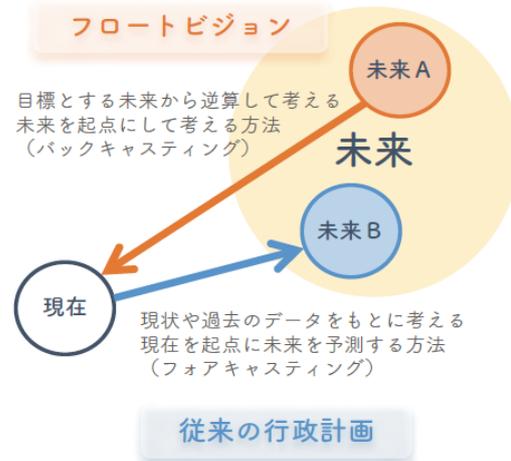
本日はコーディネーターということで参加いたしますが、「座談会」ということで柔らかくいきたいと考えています。

八王子の中心市街地で「景観のルールを作りたい」といった話をもらった時は「無理です」と最初にお伝えしました。中心市街地に関しては、既に様々な行政所管がいろんな計画を持っています。そのような状況で、景観の観点からあれこれ言うのはとても難しいことなのです。しかし、市の景観担当者から熱意あるお話をいただいたので、『フロートビジョン』と言う手法を提案しました。フロートビジョンは行政計画に位置付けないことが特徴であり、実現性についてはあえて棚上げして、みんながやりたいと思う「とがった」アイデアを絵にするものです。さらに時間設定を30年後にすることでどこからも文句は言われまいだろうという思惑もありました。

フロートビジョン手法については最初は市に断られるかと思っていたんですが、意外にもそれで良いと言ってくれた。「これはえらいことになった」と思いましたね（笑）。しかし、提案したからには覚悟を決めて取り組みました。

八王子の駅前には、ちょっと歩くと良い雰囲気のところがたくさんあります。本日お招きしたパネリストのお二人はその「良い場所」の「設計者であり実践者」です。

本日は会場にお集まりの皆様からもアイデアや助言をいただけたらいいなと期待しています。そして願わくば、まちづくりの仲間になってほしいと考えています。





石川 洋一郎さん
(株) TREEFORTE 代表取締役

中町に事務所を設けており、その事務所はもともとは祖母の家でした。

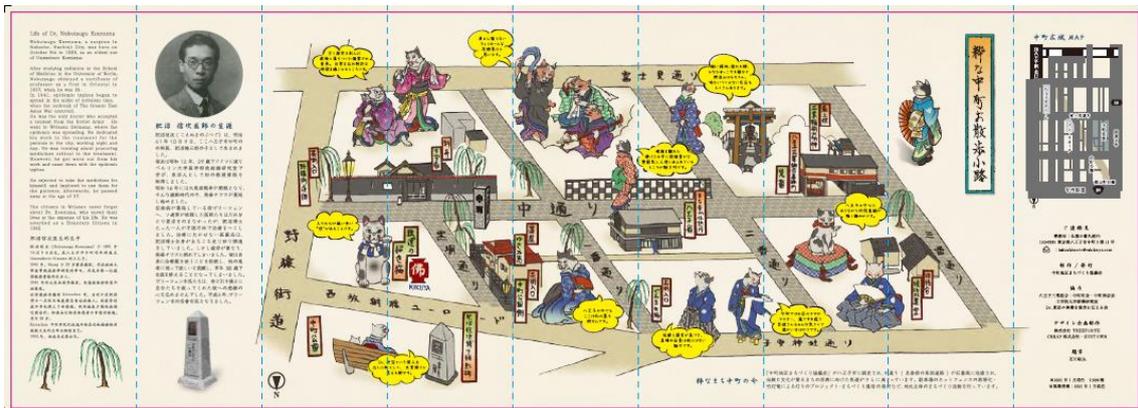
「ランドスケープデザイン」はかなり範囲の広い仕事で、職能の垣根がありません。仕事として公共施設や企業の外構デザインなども手掛けていますが、とにかく多種多様にやっています。私の仕事の多くには「緑」が共通していますが、「緑」にはいろいろな捉え方があります。「緑」は植物そのものを指すことも多いですが、「人がいる場所を作ること」を緑と表現

することもあります。

ランドスケープを理解するうえで重要な言葉を私なりにまとめているのが次のとおりです。「景色」は山・川・海といった単純な自然を指します。「風景」は景色や町などに人がいる空間を指します。「景観」は風景をより良く作り上げていったものを指し、さらに質の高いものです。例えば、中町は景観的にかなり価値の高い町ですが、その景観はすぐに作られた風景ではなく、長い月日と営みの積み重ねによって作られたものです。

景観とはみんなで作るものです。私自身も事務所を中町にかまえ、まちづくり協議会のメンバーにもなって、一市民として地域に根差して景観づくりを行っています。活動の一部を紹介しますと、過去には『中町マップ』を協議会のメンバーと共に作りました。これには工学院大学の学生も参加していて、町の歴史も感じられるものになっています。ほかにも、今年は花街のエリアリノベーションを行ったり、都立大のプロジェクトである『黒塀キャンパス』の準備を進めていく予定です。

こういった景観づくりの取り組みは、一般市民である皆さんも参加できるものです。このようなセミナーに参加しただけで満足してしまうのではなく、自分で手を動かして、手を汚して、初めてまちづくりに関われるのだと私は考えます。私たちがフィールドの窓口は作るので、臆せず参加してほしいです。みんなで一緒にまちづくりを進めていきましょう。



中町マップ



三島 由樹さん
(株)フォルク 代表取締役

私は生まれも育ちも八王子です。八王子での最初の仕事は網代園の外構設計でした。今は各地で地域の環境改善につながるようなプロジェクトを複数展開しています。

今回のメインテーマとなる『シモキタ園藝部』には2019年から関わっています。発端は小田急線の地下化に伴う上部空間の活用であり、再開発によって新しい町ができるということで、ランドスケープのコンセプト作りから関わっています。そこで「緑」をデザイナーとして作っていくのですが、私が大

切にしてきたのは、地域の人々と一緒に作っていくことです。再開発によって生まれる

「緑」については、小田急電鉄の関連会社が維持管理業務として管理していくのが通常ですが、我々は、地元の皆さんや下北沢のまちづくりに参加したいと考える人たちで管理していこうと考えました。そのためには、「緑を育む」という地域の文化を作る必要があると考えて、まずはコミュニティづくりに半年ぐらいかけて取り組みました。誰もが参加しやすい「緩い」取り組みを考えたところ、最初は20人くらいの規模で2020年に『シモキタ園藝部』としてスタートしました。

「藝」という文字は、人が木を植える姿がもとになってできたと言われています。つまり、人間の藝事の基本形の一つとして、木を植える技術というものがあるのです。シモキタ園藝部も、植物についての知識や技術を身に付けていくことを大きな目的としています。

現在は約200人のメンバーがいて、月に1回活動しています。園藝部にはいろんな人が係わっていて、地元の人だけでなく外の地域の人もありますし、学生やプロの造園家もいます。



緩く参加したい人は部員にならなくても参加できる仕組みとなっていて、参加のグラデーションを大切にしています。活動内容としては様々なことをやっていて、みんなのやりたい思いから事業をスタートしていきます。



シモキタ
園藝部



千葉 優美子さん
東京都立大学 学生

東日本大震災に被災したことをきっかけに地方創生やまちづくりに興味を持ちました。研究室にこもるのではなく、フィールドで活動を行いたかったので、川原研究室を選びました。

市との共同研究として昨年5月から協議を重ね、研究室同期の和田と一緒に『景観絵本』の実現に向けたアクションを起こした1年となりました。まち歩き調査で景観絵本のスケッチと現実のまちとのギャップを見つけ出す作業から始まり、私は網代茶屋の周辺スケッチを取り上げることに決めました。

スケッチでは地植えの植栽マスに植栽が施されていますが、実際にはなにもないただの土の状態でした。そのせいもあってか、地元の方に話を聞いてみると、無断駐輪やごみ捨て等の問題が発生していることがわかりました。そこで、昨年10月末に地植え植栽のデザインで地域課題の解決と景観向上を目指す『アシナミドリ』を企画しました。この名前には「みんなで足並みをそろえて心地良い地植え植栽や緑を増やそう」といった意味を込めました。

結果として美しい植栽を仕上げることができ、近隣住民の方から「店の前がきれいになって嬉しい」「無断駐輪やごみ捨てが減った」との声もいただくことができました。今後は植栽管理の担い手を見つけ取り組みを継続する方法を探っていきたいと考えています。





研究室同期の和田は、中町の黒塀通りのスケッチを取り上げました。スケッチにあるように、中町に着物を着ている人を増やすにはどうしたらよいか、白い室外機やごみ箱が悪目立たないためにはどうすればよいか、といったことを考えました。そこで、地元の方々が大切にしてきた黒塀をキャンバス（背景）に見立てて八王子文化・花街文化を発信する『黒塀キャンバス』を企画しました。

こちらは現在進行中のプロジェクトで、黒塀を背景に和の演出を試みたり、学生目線で写真を撮りたくなる店先や壁面を創出したりしています。先日、民家の持ち主にご協力をいただき木製の外壁や植木棚に修景することを DIY で実施しました。「軒先がきれいになってうれしい」との声を持ち主の方や道を通る方からいただいています。

今回は時期限定で実験的に設置しましたが、気に入っていただければ、持ち主の方に常設の景観整備をしていただけるといいなと思っています。こうした DIY 的な修景実験は今後も継続して実施できる仕組みができると良いなと感じています。



03 パネルディスカッション

川原 景観絵本の実現に向けてアクションを起こすことについては、本当は三島さんや石川さんといったモデルとした事例の実践者のお話を聞いてからアクションに移りたかったのですが、コロナ禍もありそうもいきませんでした。そこで、まずはお2人に千葉さんが説明したこの一連のアクションについて感じたことをお聞きかせいただければと思います。



三島 絵本の中身やその背景については非常に素晴らしいものであると感じました。景観行政としての難しさを抱えつつも、それを進めていく手法は自分にとっても参考となります。そのうえで、やはり今後が大切になってくるはずですが、この取り組みをどうやって次につなげていくのか。30年後というのを意識しすぎると皆さんにとって自分事ではなくなってしまうので、いかに小さなアクションを起こし続けていくのが大切かと思います。また、八王子市には、面白くて、パワフルで、町のことを愛しているキープレーヤーいるはずですが、いかにそのキープレーヤーと連携していくつもりなのか。そのあたりを逆にお聞きしたいです。

川原 質問を返されてしまいました(笑)。おそらく、それをまず実践したのが石川さんだと思います。うちの学生の和田君が中町でアクションを起こしたいと言ったので、まずは石川さんのところに行きました。実際に中町のお宅で黒堀キャンバスを実践させてもらい、学生の発想を十分に形にすることができたのは中町地区まちづくり協議会のコアメンバーでもある石川さんの地元への働きかけのおかげです。アクションを起こしたい時に、地元へ根差して活動している方がサポートしてくれるととても頼もしい。地元の専門家として、バックアップの仕方とかそのあたりのお話を石川さんにお聞きしたい。



石川 一般の方が景観について考える機会としてわかりやすいのが、「写真を撮る時」だと思います。カメラを構えたときに、看板だったり、ごみ箱だったり、フレームに入っ
てほしくないものがあると思います。それをなくしたり、
清掃したりすることが景観づくりにつながっていくのです
が、我々専門家は常にそういった視点で風景を見ているの
で、改善点や今我々にできることなどを示すことができ
ると思います。

川原 八王子にもいろいろキーパーソンがいるはずなんですが、お仕事にならないと関われないとか、関わるのが難しかったりします。シモキタ園藝部（以下、「園藝部」）の例を見ると、緑を入り口にして、人と関わる機会をいかにたくさん作るかといった努力が見えてきます。八王子でやるとしたらどういうものをきっかけにしてキーパーソンと関わっていくと良いと思いますか。

三島 園藝部で大切にしたのは「みんなで一緒に作っていく」ということです。こちらが用意した企画に参加してもらうのではなく、こちらも答えを持っていない状態で、みんなと一緒に答えを作っていくことを本気でやりました。そうすると、活動についてみんなが自分事として捉えてくれました。企画に賛同して参加するのではなく、自分がやりたいことをやるために参加するという機会づくりはとても大切であると考えます。

また、園藝部は緑を重視して活動していますが、緑そのものを目的にしないことが重要であると考えています。緑を駆使していかに町を魅力的にしていくかという視点が重要です。特に、緑は「食」「生き物」「工藝」といった様々なものと繋げやすく、人との関わりを作るツールとしては非常に有用であると感じています。この人は関わられるけどこの人は関われないといった状況になりにくいです。



川原 自分事にすることが大事っていう話があったけど、千葉さんにとってこの取り組みのなかで、楽しかったことや難しかったことって何かある？

千葉 アシナミドリを実施するうえで、行政職員の方々のサポートが有り難かったです。私は八王子駅前地区にゆかりがあるわけではないので、キーパーソンもわからない状態での参加となりましたが、行政職員の方々が見えないところで調整をしてくださったおかげで実施までこぎつけました。この経験を振り返ると、何かアクションを起こしたくてもやりようがなくて実行できない方がたくさんいるのではないかと感じました。今回の取り組みに興味を持ってくださった方々に、こういったサポートがあることを知ってもらえたらいいなと感じました。



川原 千葉さんがやりたいことを示してくれたから、サポートもしやすかったのかもしれないね。何かやりたいときに、どの活動に参加すればよいのかが分かるような仕組みがあるといいのかもしれないね。三島さんの園藝部とか、石川さんがこれからやろうしてる DIY 部とかね。

ちなみに DIY 部ってどんなイメージで立ち上げればいいでしょうか。持ち込めば石川さんやその人脈のサポートが受けられるとか、そんな勝手なイメージを持っていますけど。

石川 DIY 部について、人脈はともかく間口は広げておくつもりです。何かやりたいけども、どこに声をかければいいのか分からないという悩みはごもっともだと思います。そして、これは行政の役割なんだと私は考えます。我々専門家が行政に指南することで活動の入り口を広げてもらい、そこにみんなが参加してもらってことが大切だと思います。

一市民の立場では公共の管理地を勝手にいじるわけにもいかななくて、自分としては前からモヤモヤしていました。だから自分は職能を使ってでもまちづくり協議会という場所に潜り込んで、「自分でやる」ということを決めたわけです。そこには利害もなければお金も発生していませんが、結果として今この場にいらっしゃる方々と繋がることができるとてもうれしいです。まちづくりは一人ではできません。みんなと一緒にやっていくということを前提にすると、いろんな人が集まって多角的な視点が持ち寄られるので、それでうまくやっていけるのかなと思います。

川原 窓口となるのは行政のお仕事とおしゃってましたけど、黒堀キャンパスの例を振り返ると、それを既に石川さんご自身がやっているんだと思うんですよ。行政も窓口を持っているけども、民間の方にも窓口があるってことはとても大切だと思います。私はまちづくり協議会という場所に、いろんな大学の学生が「何かやりたい」という想いを持って集まってくるということを知ったときはとても感動しました。あれはすごく大切にしたいなと思いました。

千葉さんはさっき自分もまちづくりに関わりたいって言ってたけど、千葉さんの世代にはそういう人多いのかな？

千葉 個人的にはあまり多くないと感じています。だからこそ、アシナミドリに大学生が2人参加してくれたことはとても意外でした。八王子市の公式 SNS で知って、興味を持ってくれたらしいのですが、同年代にこういった場に参加する人ってほとんどいないと感じていたのでびっくりしました。

川原 石川さんはこのあたりどう感じますか？

石川 自分のように八王子出身の人が八王子のことをやるのは当たり前のように思われるかもしれませんが、地方の町なんかに行くと僕は参加する側の立場なんですよ。千葉さんや和田君なんかは、八王子出身ではないのに八王子の取り組みに参加していますが、たぶん八王子のファンになったんですよ。地元の人が自分たちのことをやるってことも大切だけど、自分の町ではないけどもファンになったから自分事として取り組むってことはすごく重要なことです。要は「ただいま」って言える第二の故郷を作るってことなんです。

川原 「ただいま」って言葉を聞いて、そこに人がいる景色が頭に浮かびましたよ。我々も、活動の中で「網代茶屋いいな」って思ったんですけど、それには網代茶屋の温かいおもてなしが含まれていますし、私自身もここまで熱い思いでこの取り組みに参加しているのは、まちなみ景観課の職員のファンになっちゃったからなんです。やっぱり人と人がつながるとファンになっちゃたりするんですね。

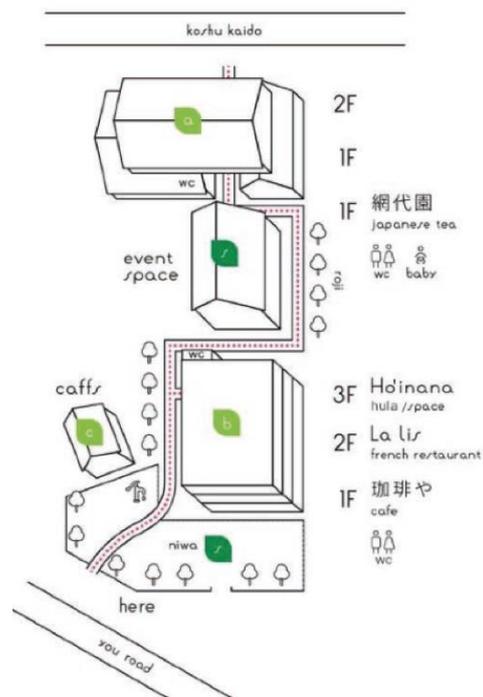
話がちょっと変わりますが、我々はまち歩きをして「いいな」って思える場所を絵本に盛り込んだわけですが、お二人から見て、八王子のまち中にはこういう良いところがあるんだよって何かありますか？言い換えれば「この辺も良いところだから絵本に加えたらどう？」っていうものがあったら教えてほしいです。

三島 地元だからってものあるかもしれませんが、特段、好きなところというのもなかったですね（笑）。皆さんも八王子のまちなかについては「まあ普通」と感じているのではないのでしょうか。私は、それでいいんじゃないかなと思っています。「普通」に思えるところに、いかに好きな部分を見出していけるかが大切であって、「普通」の中に愛すべきものが絶対にあると思います。そのうえで、新しいものを格好つけて作るのではなく、今あるものから美しいものを見出してくることが大事じゃないかなと思います。

逆に、景観のプロジェクトを立ち上げて、みんなで町をキレイにしていこうという取り組みは、これからはあんまり有効ではないと感じています。町をただキレイにすれば良いというわけではなく、キレイというのはあくまで結果です。僕がデザインするときにも大切

にしている思いがあって、これは「民藝」に例えるとわかりやすいです。民藝品って、必死に生きるためだとか、その場にあるものを活かすためだとかに作られた「結果」として美しいのであって、美しいものを作ろうとして美しくなったわけではないんです。それはいわゆる「無心」の状態です。逆に、キレイなものを作ろうとして作られたものってキレイではなかったりします。ランドスケープをデザインするときも、良い景観を作ろうとした途端に、邪心というか純粹でないものが現れてしまう感覚を常に持っています。そうならないために、地域の人と一緒に作ることでデザイナーとしてのエゴを消し去り、その人たちが必要なものを作るという考えがベースにあることが大切なのかなと感じています。

網代茶屋の話をしめすと、網代さんには八王子の文化を大切にしたいという思いがあったので、そのお役に立てるランドスケープってなんだろうという考えから入って設計しました。これは景観絵本と逆の考え方になってしまうかもしれませんが、「最後の見た目」から入るのではなく「必要性」から入ることが大切なのかなと考えています。



川原 今回の話を私なりに解釈すると、今回作った絵本は、動き出すための「きっかけ」に過ぎなくて、動き始めたらみんなで一緒に作っていくといった感じで良いのかなと思いました。その方がより多くの方が参加できますし。

千葉さんは「一緒に作る」を今回やってみてどうだった？アシナミドリとかどうしようか？後輩にどうやってバトンタッチしようか？

千葉 一緒に作っていくことはぜひやってほしいですし、後輩にも引き継いでいってほしいです。さらに言えば、自分たちがやったものよりレベルの高いものにしていってほしいなと思います。今回のワークショップでは、企画から植栽のデザインまでを主催者側で準備してしまって、市民の方々の折角の参画機会を植え付け作業しか用意できなかったんです。今後は企画・運営などの段階から想いのある市民の方々に参加してもらいたいですし、そうすることで地域の方々に必要とされる取り組みになるんだということを後輩へ引き継いでいきたいです。

川原 「この指とまれ」っていう場所と、入り口をうまく用意できれば、やりたいっていう人はたくさんいるんだろうなと思います。

04 いいねタイム & フリートーク

～展示パネルを見て、「いいね」と感じた箇所に付箋やコメントを記入～



付箋の貼り付けやコメントの記入を行う参加者

～パネリストと自由にトーク～



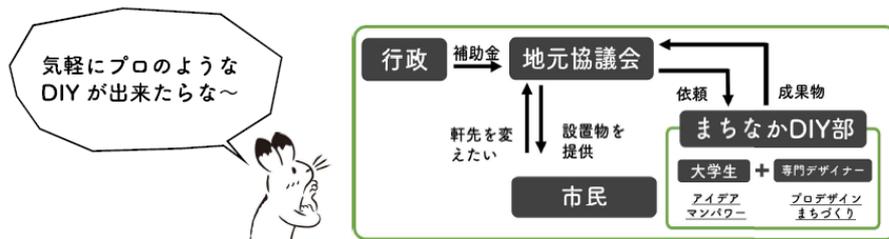
引っ張りだこのパネリストたち

05 いいねタイムのふりかえり

～参加者のコメントを確認～

川原 『まちなかDIY部ってなんですか?』というのがありますね。

石川 三島さんの園藝部に感化されて考えている企画です。中町で何かできないかなって考えから始まっているんですが、DIYであればプロに頼らずに、作る場所から管理するところまで、自分たちにもボランティアできるんじゃないかなってというアイデアです。



川原研作成 ポスターより

川原 これに関連するもので『緩い感じがいい』っていうのもありますね。高いクオリティをいきなり求めるんじゃなくて「緩い」ところが良いって。それはまさに三島さんが狙っているところですかね？

三島 そうですね。皆さんの持っている下北沢のイメージってどんなものですかね？「若者のおしゃれな街」ですかね？実際は、下北沢にはいろんな世代の人が暮らしている町なんです。なので、チラシのデザインや企画の中身なんかも全ての世代に向けたものになっています。かっこよくなりすぎずダサくなりすぎず。みんなが来たくなるものってどんなものだろうっていう点についてはかなり議論した記憶があります。



川原 いい塩梅の「緩さ」って、作るのに結構努力が要りますよね。

三島 「緩さ」って、かなり緻密な調整によって成り立っているんです。結果として園藝部にはかなり多世代の人に関わってもらえているので、少しは狙い通りにできたかなという思いはあります。

川原 ぜひそのノウハウは八王子にも関わっていただいて生かしてほしいです。今回三島さんをお呼びしたのは、ぜひ八王子で一緒にやりませんかという勧誘の狙いもあるんです（笑）。ハチオウジ園芸部なんてものがあったらいいと思います。

私も、もう一人の学生がリーダーとなって進めている「黒堀キャンパス」プロジェクトでは、「緩く」やることの難しさを感じたところです。クオリリティにこだわりすぎず、安全とか、コンセプトとずれてないかなど要所だけ抑えて実施してもらったところ、結果として私の想像を超えるいい味のものができました。こういうのいいなって思いました。

川原 次の付箋紙ですが、『管理のしやすさとか手間のかからない』っていうのもありますね。緑って管理が大変なイメージあるんですけど、この辺りプロとしてどうですか。手間のいらぬものとかあってあるんでしょうか？

石川 これは皆さん気にされる場所なんですけど、残念ながら答えは「No!」です。植物って生きてるんですよ。極論を言えば「管理できないなら手を出してはいけない」ってことになるんですけど、そういうわけにもいかないですから、やれることからやってくしかないです。管理するという点を踏まえてから始めることは非常に大切



で、そこを疎かにすると最低限の管理となってしまう行政の植え込みみたいになってしまいます。ただ、植物は「ノーメンテナンス」はできないけど「ローメンテナンス」にはできます。そういった視点での植物の選び方とか手法のノウハウは我々専門家がアドバイスできる部分です。

川原 実際にやってみて感じるのは、維持管理を全部行政にやらしてもらおうと思うと、サツキとか、手間はかからないが愛の少ない緑化になりがちですね。しかし、維持管理だって、やって楽しいものであれば趣味でやってくれる人も増えるんじゃないかと思います。シモキタ園芸部なんかはその辺うまくできているように見えますが、どうやってるんですか？

三島 管理については園芸部でもたくさん議論してきました。まず「植栽管理」という言葉が良くないと考えています。「管理」が好きな人ってあんまりいないじゃないですか。「植栽管理」って言うと、どうしても「キレイなままの維持」といったイメージを持ちがちですが、園芸部で大切にしている考え方としては、「キレイである」ことが目的ではなくて「植物が健康であることが第一である」ということです。植物が健康であるためにはどのようなメン

メンテナンスが必要かということを考えて実行しています。

そこで「管理」ではなく「お手入れ」という言葉を使うようにしています。当然ですが、健康な植物はローメンテナンスになりますし、見た目重視で健康を疎かにするとハイメンテナンスになってしまいます。ですから、植物の健康に目を向けることはとても大切であって、それが結果としてキレイな風景になっていくのかなと思います。

川原　すごくいいキーワードをいただきましたね。

川原　会場にお集まりの方々の中にも、緑に興味がある方がいるんじゃないかなと感じています。緑のことで、あるいは公園でこんなことやってますよとか、景観絵本の新しいアイディアとかもらえるとありがたいなと思うんですけど、どうでしょうか？

参加者（北見さん）　八王子で「冒険遊び場」というプレーパークの活動をしています。我々は自然を使わせてもらっている立場なので、樹木にロープを張ったりすることで、自然を痛めつけてしまっている自覚があります。しかし、樹木のお手入れをしてくださっている団体もあるので、我々はその方々の努力を裏切らないように、ロープを張る際は必要な養生を行ったり、焚火の際は直火にしないようにするといった工夫をして、できる限りの配慮をしています。

川原　緑は使うことが前提にあってもいいんじゃないかなと私は思います。石川さんも以前おっしゃっていましたが、「ライフスタイルとしての緑」みたいな考え方で。

石川　そうですね。緑ってただ植物のことを指すだけではなくて、周りに緑がある状態のことを緑と呼んでもいいんです。さらには居心地のいい空間を作ることを緑と呼んでもいい。そういうのをひっくるめて、ライフスタイルのことを緑と呼んでもいいんです。

川原　町の中に緑があるライフスタイルっていうのを考えていくと、もっといろんな人が関わってくれるかもしれないですね。

参加者（佐藤さん）　維持管理の話がありましたが、「管理」ではなく「お手入れ」と言うってお話にはとても共感できて、良いお話がたくさん聞けたなと思っています。NPOの活動として「コミュニティガーデン」という地域の庭作りをしています。あくまで公共空間ですので、ローメンテナンス・ローコストは重要な観点です。我々はそれに加えて「エンjoy」の観点をとても大切にしています。ローメンテナンス・ローコストだけど、とても楽しい活動というのを心掛けています。さらに、庭を作る側だけでなく、その花壇を見る人も楽しめる公的なセンスをもって花壇づくりができるといいのかなと思って活動しています。

川原 今のお話を伺って、公共の土地だけじゃなくて民間の土地でも面白い取り組みができるんじゃないかと私の空想が広がりました。「黒堀キャンパス」なんかも修景の対象は個人のお宅やお店です。店先の緑も、お店の人以外の植物好きの人がやってもいいんじゃないかと思います。店先を「植物好きな一般の人が活躍できる場」として活用できれば、みんなが喜ぶ良い結果が得られるんじゃないかと思いました。

参加者(佐藤さん) 公園とそういう民間のお店なんかが繋がっていくと、まちなみとして素敵だなと思います。

川原 そういう観点からすると、アシナミドリってすごく良いネーミングだなって思ったけど、そういう想いがあったんだよね？

千葉 そうですね。そういうところは結構意識してきました。店先などの足元がつながると、「線」としてつながって行って「あれ、みんな同じことをやっている仲間じゃない!？」って気持ちになることができるんじゃないかと思いました。

実は、アシナミドリの事前調査で、過去にも同じようなことをやってきた方がいたということを知りました。保さんという方です。そういった熱意ある活動が行われていたにもかかわらず、研究活動をしている私が気づかないくらい目立っていないというのは一つの課題であると感じていて、そういったポテンシャルの可視化じゃないですけど「まとまった窓口があるよ」ってアピールできればいいなという想いも込めて、チャーミングな名前を付けてみました。



参加者間で意見を出し合い配置を検討

川原 会場にお集まりの方々の方が、地域で活動しているグループについては詳しいんじゃないかと思います。ぜひそういう人たちをご紹介いただいて、想いのある方たちと一緒にやれるといいのかなと思います。いずれご紹介いただけるの方々にお話を聞きに行こうかなと考えています。

06 まとめのおはなし

川原 ディスカッションは、まだまだこれからって感じなんですけど、お時間が来てしまいました。最後に皆さんから短くまとめのお話をいただきたいと思います。三島さんとはぜひ一緒に活動したいと思うのですがいかがでしょうか。

三島 それはもう是非にというところです。

行政の方から、園藝部はどうやって参加者を200人も集めたのかと聞かれていたので、最後にお答えしたいと思います。これについて思い返すと、参加の入り口を開こうとしたことに尽きると思います。園藝部については「町の人みんなが緑を育てられるような町にしたい」というビジョンがあったので、何かを排除することにとことん立ち向かいました。例えば、植物って種類や在来種・外来種といった好みが多々だと思いますが、「園藝部は在来種を大事にしています」と掲げたとたんに、外来種好きの人が入れなくなってしまう。そういうのは無しにして、ビジョンに賛同してくれる人みんなが参加できるようにしました。ビジョンも普遍的なことを掲げているので、賛同しない人はいないと思います。

とにかく受け入れて、みんなで考えてみんなで作っていく。そしてそれを楽しむ。といったことを地道にやってきた結果、主催者が呼びかけた人だけじゃなくて、お友達や子供を連れて来たりといったように自然に輪が広がって今に至ります。

川原 次は市の担当者である鈴木さんにお話を伺いたいと思います。今回、緑をきっかけに繋がってこうというお話があったかと思いますが、景観絵本もそういう役割を果たせそうだなと思っています。実際この景観絵本を作ってみてどうですか。皆さんの仕事ぶりが楽しそうには見えてましたが（笑）。

鈴木 楽しいです。それは間違いないです。ただ、今の時点でアクションプランとかロードマップとかが描けているわけではありません。ですから、皆さんのお力を借りながら、何か楽しそうなことをする人に寄り添って、あわよくばそういう方々を繋げていくといった役割を、まちなみ景観課として果たせたらなと思っています。



川原 行政の関係者じゃないと分からないかもしれませんが、景観のお仕事って「誰かが作

った計画にケチを付ける」みたいな捉え方をされがちなんです。そんな中で、こういった絵本が、楽しく一緒にやるための道具になるかなって思って、個人的に手ごたえを感じています。

鈴木 そのとおりだと思います。うまく使っていただきたいと思います。ただ、川原先生にも言われていますが、この絵本は Ver. 0.5 であって 1.0 にもなっていないというような側面もあります。まだお話をお聞きできていない方々もたくさんいますし、もっといろんな方の意見を聞きながら絵本を育てていきたいです。そして、そのような循環の中で、行政が人を繋ぐ役割を果たして、みんなが同じ目標を目指せるような状態が作ればいいなと感じています。

川原 では、絵本を見て何かインスピレーションを感じた人は、市のまちなみ景観課にお問い合わせしてもらえばいいのかな？

鈴木 ぜひそうしてください。

川原 それでは石川さんお願いします。

石川 今日はありがとうございました。わかりやすく言うと「プロに任せるとこは任せる。みなさんでやれるとこはやる」といったことだと思います。我々プロは皆さんができない部分を担ってベースを整えます。そうやって皆さんが活躍していただく場を作るので、まちなみや風景を作るのは皆さん自身なんですといったことを最後にお伝えしたいです。

川原 最後に千葉さん。

千葉 本日は学生代表ということでお話させていただきましたが、「行政」でも「専門家」でもなく、「学生」がやるというのは非常に意義のあることだと感じました。今回の取り組みの中で、「学生がやる」ということで話を聞いてくれた方がたくさんいらっしゃいますし、「学生さんが頑張ってくれるならこっちも頑張ろうかな」なんて言葉も多くいただきました。本日は八王子市近隣の行政の方々も会場にいらしているとのことなので、「ぜひ地元の学生さんに声をかけてみてはいかがでしょう」という提案を最後にさせていただきます。

川原 私の想いは千葉が全部話してくれました。ということで、皆さん本日はありがとうございました。